

「口腔がんを見つけよう - 1」

早期発見、わずか20%

新谷悟・昭和大歯学部主任教授

口の中にできる「口腔がん」。日本では年間約6000人がかかり、約3000人が死亡しているとされるが、自分でも見つけられる場合があるという。早期診断や治療に取り組む新谷悟・**昭和大歯学部**主任教授に聞いた。

どんな種類がありますか。

「舌がんのほか、舌と歯茎の間でできる口腔底がん、歯茎にできる歯肉がん、口の天井の部分にできる硬口蓋がんなど、さまざまな場所に発生し、これらをまとめて口腔がんと呼びます。日本ではがん全体の2～4%を占め、部位別では舌がんが最も多いです」

口の中の病気は虫歯や歯周病、口内炎ぐらいしかイメージできませんが。

「その点が問題です。口にがんが発生すると思う人は少ない上に、初期のがんなのに口内炎だと思い込んで診断・治療が遅れるケースが非常に多い。口の中は見えるし、感覚も発達しているので大丈夫だと思うでしょうが誤解です」

早期に発見される率は。

「全体で20%ほど。部位別では最も発見されやすい舌でも約23%で、口唇は約18%。ほおの粘膜は約8%、歯肉は約6%しかありません」

早期に見つかれば治りますか。

「早期は治療すれば5年後の生存率は90～95%です。話したり飲食したりする口の大事な機能も、ほとんど障害を受けずに済みます。しかし、進行がんでは約50%に低下し、舌を半分以上切除したり、顔や首などに大きな傷あとが残ったりすることになります。体のほかの部位から骨や皮膚などを移植して再建しますが、生活の質（QOL）の低下は避けられません」

「進行がんでは、切除や抗がん剤投与に加え放射線治療を1カ月以上続けることも多く、平均入院期間は70日以上と、早期がんの3倍以上になってしまいます。こうした現状から、私は早期発見の割合を今の20%から80%に高める『第2の8020運動』を提唱しています」

× × ×

しんたに・さとる 61年香川県生まれ。岡山大歯学部卒。愛知県がんセンター、米ハーバード大歯学部、愛媛大医学部などを経て、06年から**昭和大歯学部顎（がく）口腔疾患制御外科**主任教授。

(2008/12/24)



新谷悟・昭和大歯学部主任教授

[トップページへ戻る](#)

記事、写真、グラフィックスの無断転載を禁じます。

2008 Kyodo News (c) Established 1945 All Rights Reserved